

UEFA チャンピオンズリーグにおける守備からの攻撃パターン

川井 建太郎 (競技スポーツ学科 コーチングコース)

指導教員 山田 庸

キーワード： カウンター， 守備ブロック， セカンドボール

1. 緒言

近年のスペイン代表、バルセロナの活躍以降、パスを多用しポゼッション力を上げ相手を崩すサッカーをするチームが増加した。一方、ワールドカップ 2014 大会ではボールを奪ってから素早く攻撃へ転ずるカウンター攻撃が多く見られた(FIFA, 2014)。つまり現代サッカーでは、強固な守備戦術が必要になっている。自陣で守備ブロックを構築し、ボールを奪うやいなや素早く攻撃に転じ相手守備が整う前に得点チャンスを作ることができる。また、ボールを奪う位置や奪ってから攻撃に関わる人数によっても得点のチャンス、カウンターの成功率なども変わる。

これらの守備から攻撃に転ずるパターンを検証することが重要であると考えられる。

本研究は世界が注目する欧州各国による欧州サッカー連盟(以下、UEFA)チャンピオンズリーグ 2014 - 2015 において実践される守備からの攻撃パターンを検討することを目的とする。

2. 方法

2014 - 2015UEFA ヨーロッパチャンピオンズリーグ準決勝(1st, 2nd. leg)および決勝の計5試合における、ボールを奪ってからシュートに至った計 98 プレーを対象とした。

大会公式映像を観察し、測定誤差を最小化するためにピッチの縮尺図を用いて記録した。なお、データ記録は、サッカープレー経験がある著者自身が行った。

3. 結果

図 1 は、ボールを奪った位置を示しているボール奪取の位置について、自陣でボールを奪いシュートまでいったケースが 42%と一番多かった。ペナルティエリアでボールを奪取するケースは非常に少ない結果となった。又、敵陣をバイタルエリア、バイタルエリア外と区分したが、同等の比率となった。

4. 結論

1) チームによるボール奪取より個人による前からのボールを奪取の方がチャンスは大きい。

2) ボールを奪う位置が高ければ高いほどチャンスは多く、少ない人数で攻撃できる。すなわち、前線での守備が効果的であればあるほど素早い攻撃につながる。しかし高い位置で奪えるケースは少ない。

引用・参考文献

FIFA technical study group (2014) 2014 FIFA world cup Brazil technical report and statistics. gallegria ag; Berneck, p. 45.

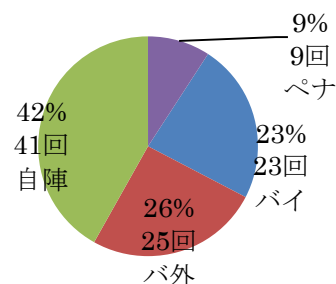


図 1 全体のボールを奪った位置(N=98)